

「ひびく」から「わがごとく」へ

凝地澄子さん

〈山崎千秋さんとの出会い〉



私が人権教育を勉強するようになったのは4年前からです。そこには、一人の女性の存在がありました。

験が語られました。

涙ながらに差別の現実を語る高校生など、その問題を「わがごとく」として感じ、その解決に向けた営みについて、参加者が熱く語り合いました。

今号では、その様子を紹介し

森口健司さん



平成17年に始まった「解放未来塾」で「今、ここ」にある部落差別の現実に深く学び、その

問題を解決する主体として、小学生、中学生、高校生が「人権の町づくり」の中核になっていく。そんな営みがスタートしました。

彼女は「解放未来塾」の運営委員の二人が、人権問題に取り組んできた思い、揺れてきた思い。その願いや苦悩を精一杯の言葉で語っていただきます。その語りに「ひとごと」では

〈同和教育は怖い〉

御荘文化センターで、町内外から約400名が参加して「愛南町人権ふおーらむ」が行われました。当日は、コーディネーターに森口健司さん、パネリストとして解放未来塾運営委員の凝地澄子さん、宮崎茂さんが問題提起を行ったほか、参加者からも、次々と差別に対する素直な思いや自らの体

間を大切にします。人間が、人

「自分は何が問われているか」ということを問わ

それからというもの、同和教育に関する研修会が怖く、教員として「どう同和教育と向き合

まだまだ、切ない現実が私

30年ほど前、宮崎県での同和

教育の大会で、愛媛県の先生の

発言が問題になり「研究大会で

うべきなのか」と、正しい答えばかりを探していました。その結果「差別は良くない」という言葉を発していたと思います。

また、私は「人を差別する言葉を使いたくない」という気持ちから「相手に配慮を欠くと思われる言葉」を知りたいと思い、勤務先の学校で「そういう言葉を書いた書物はないですか」と聞いたことがあります。

その先生から「ばかもん。そんなことをすること自体が差別だ」と大きな声で叱られました。顔から血の気は引き、胸は高鳴り、体は硬直して、穴があつたら入りたいたい気分でした。

その時、強く心に決めたくて。「やっぱり、同和問題は怖い。二度と人に聞かない。関わるまい」と。今、思えば、私の行動は、その言葉の持つ差別性を知るともせず、ただ、知識だけで差別を避けようとしていたのだと思います。

〈私を変えた人権教育〉

同和問題に対し、心を閉ざしていた私でしたが、大森文化会館の「つくし会」で講演した川口泰司さんに会の終了後、長年、心に溜

まっていた同和教育に対する疑問をぶつけることができました。「同和教育を怖いものだと思っていること」「配慮を欠くと思われる言葉のことで、叱られたこと」など。今までの苦しさやよみがえってきて、泣きながら話していました。じつと、最後まで私の話を聞いてくれた川口さんは「教員という服を脱いだらええんよ」と優しい口調で言ってくれたのです。

その言葉に癒され、今まで自分を苦しめていたのは同和問題ではなく、自分自身だったんだということに気がきました。

「そうか、ここでは、何でも聞いていいんだ。分からないことに分かった振りをする必要はないんだ」「間違いに気が付いたら、素直に謝ろう」と思えた時、しんどさや苦しみの涙が、いつのまにか、安心したうれしさの涙に変わっていったのです。ただ、自分が素直になれば良かっただけなのに、随分、遠回りをしてきたものだと思います。

〈母への想い〉

私には、産みの親と育ての親

がいます。兄と妹もいますが、宇和島で生まれてすぐに母の里、城辺に預けられ、一人っ子（養女）として育ちました。育ての親は、自分の人生を、私を育てることに捧げてくれた母でした。そんな母に私は、成長とともに、心のこもったやさしい言葉をかけることができなくなっていました。

母は、24年間もの闘病生活の後、亡くなりましたが、人権教育を学び、多くの方と出会う中で、最期に「育ててくれてありがとう」と心からの思いを伝えることができました。

「もう少し早く、人権教育に出会えていたら、素直な子でいられたのに。そうすれば、もっと母と楽しい時間を過ごせたのに」と、思えてなりません。

素直になれなかった自分を認めたら、素直になれた自分が好きになっていく。人権教育は、自分との出会いから始まる自分づくりの旅のように思えてなりません。人との出会い、つながりが、人生を豊かにしてくれると実感しています。

〈子どもへの想い〉

私には3人の子どもがいますが、今、改めて母に感謝したいことは、私に「差別の芽」を植え付けなかったことです。

親は、我が子が、人を差別したり、いじめをする子であって欲しくないと望みます。それは逆に、子も親に望んでいます。

自分の親が人を差別している。親の口から差別発言を聞く。人権教育を真剣に学ぼうとする子どもであればあるほど、そんな親の姿は辛いものです。私は、そんな辛そうな子どもたちの声を何度か聞いたことがあります。

子どもは親を愛し、尊敬しています。そして、親も子を愛し、自分の幸せよりも、子どもの幸せを第一に願うと思います。だからこそ、親として、子どもの「本当の幸せ」とは何かを考えていく必要があると思います。そういう親子関係でありたいと願っています。

森口健司さん

凝地先生の思いが、会場全体に染み込んでいきます。人権を学ぶ喜び。それは正に、人間として輝いて生きることなんだと

思います。「解放未来塾の子どもたち、高校生が、一生懸命のまなざしを送ってくれています。この場には、安心、生きる喜びがあります。」



宮崎茂さん

私からは「結婚差別」について話をさせていただきます。今から話すことは、どこかよその話、作り話でもありません。人から聞いた話でもありません。私自身の体験です。

〈26歳のときの自分と部落差別〉

私たち夫婦は、私が22歳、彼女が19歳で知り合いました。5年越しの交際の後、結婚を決め、彼女の両親に結婚の申込みに行った時のことです。当時、私は26歳でした。部屋に通され、何から切り出そうかと考えながら、腰を下ろす直前、いきなり「お前は部落出身だから、うちの子とは結婚させるわけにいかない」その一言に、どう対応すればいいのか、頭の中が真っ白になり、考えることも、言

葉も、何もできませんでした。その後にも、両親からはいろいろと言われたようですが、何も耳に入らず、何も覚えていません。その後、どうやって帰ってきたのかさえも覚えていません。

その言葉がでるであろうということは予測していましたが、その場の雰囲気や心の準備もできないまま、突然できたその言葉を、当時の私には、受け止める力も余裕もありませんでした。

26年間の私の人生などには全く触れず「部落出身」という一言で、一人の人間の全てを否定し、別の世界に住む、人間外の人間として判断される。これが「部落差別なんだ」と気付かされた時、気持ちはボロボロになっっていました。

そういうことがあり、私たちは駆け落ち同然で、隠れるようにして籍を入れました。

〈父親として息子の結婚に想うこと〉

あれから26年が経ち、来月には23歳の誕生日を迎える息子が一人います。

その息子が高校生になった頃

から、私の父が、私につぶやくように言った「ある言葉」を思い出すようになりました。

それは26年前「おまえは部落出身だから」の言葉に打ちのめされて家に帰り、そのことを父にすべて話したときの言葉です。

父は黙って何も言いませんでしたが、しばらくして、窓の外景色を眺めながら、私の顔を見ることもなく、ただ一言「お前もか」と、ポツリとつぶやいたのです。私には、その言葉の意味が理解できませんでした。

シヨックを受けて帰ってきた私には、何の慰めにも、力にもならなかったことを覚えています。

あれから20年近くが経ち、あの時の父の言葉を、なぜか思い出すようになりました。

父の心の中には、この世の中から「部落差別をなくす」という、究極の目的と同時に、一番身近な家族に「差別が及ばないよう」に」という強い想いがあったはずで

です。私から、私が結婚を断られた時、一番しんどかったのは父

だったのかもしれない。辛かった。悔しかった。怒りに燃えたのは、私以上に、父だったはずで

「お前もか」という言葉の裏には「差別をなくすことができなくてすまなかった」「家族に降りかかる差別を防ぎ切れなかった」という悔しさが込められていたように思います。

私も、息子の結婚のことを考える歳になり、あの時の父と同じように、自分の息子を前にして「お前もか」と、言わなくてはならない状況を想像してしまっています。

父と私。親子二代で、息子を前に「怒り」や「悔しさ」。

「つらさ」や「悲しみ」こんな想いをこめた言葉だけは、掛けたくはありません。結婚後の生活に心配や不安はあっても「結婚おめでとう」と、素直に喜べる言葉をかけてやりたいと願っています。

〈つながりあった家族〉

現在、結婚から26年が経ち、親子の断絶の時間はありましたが、その後、しっかりと向き合い、長い時間とつながりの

中で、お互いの理解と信頼を得てきました。現在は、お互いの家を行き来するようになり、あの時の両親を「許す」ことができています。

塾生には、まだ「結婚差別」の意味を受け入れることはできないかもしれませんが、早ければ数年の内に降りかかって来るかもしれない、重大な問題です。私たちは、そういう危機感をいつも抱いています。

この会場にいる塾生の親達も、私と同じ想いを抱いているはずで、まだまだ「結婚差別」が解消されたと言えない現実があります。姿・形を変えて、この愛南町にも根強く存在しているからです。

ここで「部落差別」「結婚差別」に関して、明るい展望の持つる事例を紹介します。

平成17年 人権に関する意識調査から

「我が子に限って」という言葉があります。娘の結婚が正にこの言葉でした。

娘が、同和地区の同級生と交際しているということを周りの人から聞きましたが、親である私は、

全く気付きませんでした。

私は、高校を卒業し、就職すれば、いずれ別れるだろうと楽観視していました。しかし、娘が22歳の時、彼がスーツを着て、一人で結婚の申込みに来ました。「これは、いくら反対してもダメだな」と直感しましたが「まだ早い」ということで、その場は断りました。

このことについて、長男に、本当は反対したい旨の話をしました。すると逆に「お母さん、まだそんなことを考えてるの。職場でも研修しとるんやろ」と。この言葉に、家族が支えてやらなかったら、誰が娘を守るんだ。私の心は決まりました。同時に、親類や世間からの風評を、私が一身に受けるという決心でもありました。

彼は、2度目も一人で結婚の申込みに来ました。その後、承諾し、両家の家族だけで、ささやかな食事をして結婚生活を始めました。

親類の中には「住む所だけは同和地区ではなく、地区外に家を借りたら」という人もいましたが、娘は動じることなく、

堂々と彼の家で生活していきま

す。
今では、孫二人にも恵まれ、最初は、世間でもあれこれ言われましたが、人の噂も75日というように、今は親類の人たちも認めてくれ、私もよくぞ耐えたものだ、我ながら「母は強し」の想いを実感しています。
孫が結婚するとき、私が悩んだことを娘が悩まなくてもいいような社会になって欲しいと切に願っています。

この手記のように、結婚差別の壁をぶち破るのは大変なことです。でも、家族や身内に一人でも味方がいれば、仲間がいれば、その壁を破る大きな力と勇気になります。私自身の体験からも自信を持って言えることです。

このような例は、まだまだ少ないかもしれませんが、

しかし、私たちは、心強い支援者の存在を知ることができました。このような考え方を持つ心強い味方や支援者が、まだまだたくさん愛南町にいると信じます。そう思うことで「私もまだまだ頑張るぞ」という力が湧

いてきます。

〈塾生に伝えたいこと〉

私たちは、部落差別をなくしていくことと同時に、塾生には「『差別に気づくこと』『差別から見ぬふりをしないこと』『勇気を持って自分の思いを伝えること』をめざし、仲間づくりを通じて自分らしく生きる」ということを指導しています。

でも、彼や彼女らはまだ小学生や中学生です。高校生なんて一人になると、踏ん張りたくても、踏ん張りきれないこともあります。

近い将来、遭うかも知れない「結婚差別」に対して「差別に遭っても、くじけず頑張れ」と言うことも、時には必要かもしれません。でも、この子たちが、そんな目にあわないように、指導者である私たちも踏ん張ります。そして、この会場にいる皆さんも、共に踏ん張っていただきたいと思います。